

## 『順中論』所引の

## 『大般若波羅蜜經』について

安武 智丸

【1】無着 (Asaṅga, ca. 395-470) 作られた『順中論』、具では『順中論義人大般若波羅蜜經初品法門』は、サンスクリット原典、チベット訳とも失われ、嬰曇般若流支の漢訳が伝えられるのみである。本論は無着が因の三相説に闡説していることから、初期の仏教論理学説を伝える論書として諸先学によって注目されてきたが、その唯一残された漢訳の生硬さのためか、論全体に対する本格的な研究は未だなされていない。しかし本論は瑜伽行唯識学派の祖無着による『中論』の注釈であるとともに、『中論』の論拠を般若経中に具体的に求めた論であるという点で注目に値する。それは本論が、般若経——龍樹(中観)——無着(唯識)というインド大乘仏教史の根幹に関わる問題を内包していることを示すに他ならないからである。そこで本発表では、この『順中論』に引かれた『大般若波羅蜜經』からの二カ所の引文と、それに該当する『大品般若経』の法施品と遍学品の現行サンスクリットテキスト、チベット訳、及び諸漢訳とを検討し、『中論』を注釈する無着の課題を明らかにしたい。

【2】無着は本論冒頭において『中論』帰敬偈を提示した後に、『中論』全体をこの帰敬偈の展開として次のように捉えている。

是の如き論偈、是れ論の根本にして、盡く彼の論を摂す。我

今更に解するに、彼復た義有ること、是の如し、是の如し。彼の義の如く説くこと、是の如し、是の如し。諸の衆生の喜樂、取着を断ずること、是の如し、是の如し。義に随いて論を造す。次第有ること無し。

『中論の義に順じて大般若波羅蜜經初品法門に入る』という具体名も示すように、本論は他の『中論』註釈書と異なり、『中論の義』帰敬偈の構成に順じて「八不」「断戲論法」「因縁(縁起)」の次第で論が展開され、般若波羅蜜の解明を一貫としたテーマとしている。『大品般若経』からの最も長い引文はこの中「八不」と「断戲論法」との教証として「大経の中に言く」という形で引用され、それぞれ法施品と遍学品とに対応している。しかし『順中論』以前に訳出された『大品般若経』と比較すると、『断戲論法』の教証である遍学品がほぼ経のままに引用されているのに対して、「八不」の教証である法施品は文脈の整理と表現の付加が看取される。

【3】無着は『順中論』造論の動機という設問に対して、ただ法施品の引用のみで回答している。その概略は次の通りである。善男子善女人が「未來世に於いて」般若波羅蜜を説くとしても、それは相似般若波羅蜜 (prajñāparāmīta-pratīvanika) であり、真実般若波羅蜜 (prajñāparāmīta) ではないという仏説に対して、インドラ神は相似般若波羅蜜と真実般若波羅蜜との区別を問う。そこで仏陀は善男子善女人が相似般若波羅蜜を説く根拠を、「彼の是の如き人、方便を知らずして、有所得なるが故なり (upalambhavyogena)」と説き、それに対する真実般若波羅蜜を次のように示して法施品からの引用を終えている。

一切法の自体性空 (svabhāvena śūnyah) の如し。若し其れ彼の法自体空なれば、彼の法無体 (abhava) なり。若し無体なれば、是れ般若波羅蜜と名づくるなり。若し是れ般若波羅蜜なれば、彼の少法として捨つ可き、取す可き、若しは生、若しは滅、若しは断、若しは常、若しは一義、若しは異義、若しは来、若しは去無し (ya prajñāpāramitā sa na kasyacid dhamasya-ayūhālan va niryūhālan va upādo va nirodho va uchedo va śāsvato va ekarthatā va nanarthatā va āgamo va nivgamo va)。此れ眞實般若波羅蜜なり。

『順中論』 訳出以前の『大品般若経』の諸訳では、渾然と説かれる相似般若波羅蜜と眞實般若波羅蜜との文脈が、『順中論』中では手際よく整理され、一方で「方便を知らずして」という相似般若波羅蜜説示の根拠と、眞實般若波羅蜜の具体的表現としての「八不」が付加されていることが看取される。この付加が、無着がテキストとした経そのものの増広であるのか、或いは無着の意図的な付加であるのかは明らかではない。しかし『順中論』造論の動機を考える上でこの二点は重要である。何故なら「方便」と「八不」とは対応関係にあると考えられるからである。『順中論』では後に龍樹の『中論』造論の意図を論ずる中で、「般若波羅蜜とは何か」という問いに、「八不」をそのまま引用して答えている。「八不」とは「一切法自体性空」という般若波羅蜜の具体的表現であり、そのような表現こそが般若波羅蜜の「方便」に他ならない。そして、それが『順中論』造論の動機であることを、無着は法施品引用の後に明示している。

彼の因縁に依るが故に此の論を造す。我れ是の如く般若波羅蜜を知る。此の方便の故に、我今解釈せん。謂う所の中論の

門に入るなり。

それは無着が引用することのなかった『大品般若経』中のその後の展開とも符合する。

カウシカよ、このように「般若波羅蜜を」現に解説しているその諸々の善男子善女人は、似て非なる般若波羅蜜を解説することがないであろう。それ故、カウシカよ、実に善男子善女人はこのように般若波羅蜜の意味を表現しなければならぬ (prajñāpāramitāya artho vyapadesītyayam)。

このような経と論との対応は、無着がこの仏説を自己の解題として担うことを意味していると思われる。

【4】『順中論』では、その後「相似の空」「因縁（縁起）の戲論」という問題が論じられていく。このような論展開は、相似般若波羅蜜が般若波羅蜜として説示される「未來世」が、無着にとつては龍樹なき後の「現在世」に他ならないことを物語るものである。無着にとつて大乘仏教の根源的課題である般若波羅蜜をそのテーマに据えた『順中論』の著述とは、『中論』への誤解、すなわち相似の仏教が横行する「現在世」において仏教を根源から問い直し、「智慧の方便」として般若波羅蜜を表現し直すことであった。それはまた説法者仏陀への敬礼を表明して縁起の教えを問い直し、「空性」と表現するに至った龍樹の『中論』著述の解題と軌を一にするものでもあろう。